

# 足がしびれる→慢性硬膜下血腫

## 患者を生きる

2378

### 脳と神経

異変を感じたのは昨年3月、旅先でレンタカーのハンドルを握っている時だった。

神奈川県茅ヶ崎市の寺田哲郎さん(88)は、故郷の島根県に夫婦で帰省していた。石見空港に着いて車を借り、まず入院中の姉を見舞った。次は墓参りにお寺へ。ところが、駐車場にうまく止められない。アクセルとブレーキの操作に、なぜかもたついた。

「この車、おかしいなあ」  
レンタカー会社に電話をする  
と、担当者が飛んできて車を交

換してくれた。一安心してホテルに向かったが、到着して運転席を降りた時、妻の満紀子さん(73)から呼び止められた。「あなた、どうしたの。足、ひきずってるわよ」

確かに、右足がしびれるような感じがした。でもひどくはない。念のため、宿に何種類もあつたお風呂を1カ所だけで我慢して、床に入った。

その夜、トイレに起きた時、思わずテーブルや柱に手が伸びた。よろよろと立ち上がる夫の様子を見た妻は、三女の実紀子

### 「この車、おかしいなあ」

#### 慢性硬膜下血腫 ①

さん(40)に電話した。

「お父さん、変なのよ」

「なにかしら。車は、危ないから返しちやうた方がいいよ」

翌朝、哲郎さんは大丈夫だと言つて、足踏みを試みせた。

不安がる妻を助手席に乗せて空港に向かい、空路で羽田空港に戻ると、三女が幼子の手を引きチャイルドシートを抱えて待ち構えていた。駐車場に止められた車を父親には運転させられない、と心配したからだ。

それでも「すぐ病院に」とは誰も考えなかった。数日後に予

定していた持病の通院時に、ついでに診てもらえばいいー。



車の運転は以前から大好きだった―神奈川県藤沢市

自宅に帰り、夕食のテーブルにいた時、長女の加代子さん(55)から電話が入った。旅先の話題から、哲郎さんの体の不調の話になった。「足がしびれる」と聞き、臨床検査技師の加代子さんは胸騒ぎがした。まさか、脳梗塞の症状では？ そうなら治療は一刻を争う。「すぐ病院に行こう。私も行くから」加代子さんが勤める東海大病院(神奈川県伊勢原市)で検査を受けた。医師は言った。「頭の中に血がたまる慢性硬膜下血腫です。手術は早いほうがいい。今からやりましょうか？」

(吉田晋)

「患者を生きる 慢性硬膜下血腫」は6回連載します。  
ご意見・体験は、<メール> iryo-k@asahi.comへ。